

Wú suǒ bú zhì
无所不至

至らざる所無し

うえだあつお
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

孔子の生きた春秋時代と、それに続く戦国時代は、久しく続いた封建体制のタガが緩んで、下剋上の風潮が日常化した時代でした。中国史上まれに見る混乱の時代でしたが、一方、一部の知識人たちにとっては、混乱あるが故の行動の自由が許されていました。許されていたというより、そういう隙間が生じた時代であったと言った方が良いかもしれません。

ここでいう一部の知識人とは、相当の能力を持ちながら、戦乱や権力闘争の煽りを受けて国を追われ、仕官を求めて各地を流浪する人たちのことです。当時はこういう人たちが全土に溢れていました。孔子もその一人でした。中には孔子やその弟子たちのように、高い理想を掲げて主君を説得し、理想の国家を実現しようとする人もいましたが、一方、個人的な野心の為だけに仕官を求める人たちも少なからずいました。

こういう状況を踏まえて、孔子は次のように言っています。「鄙夫可与事君也与哉！(Bǐ fū kě yǔ shì jūn yě yú zāi!)」(鄙夫は与に君に事うる可けんや)〈陽貨第十七〉。下司の輩と一緒に主君に仕えることができるだろうか、と。「鄙」とはもともと地域集団の呼称で、村や集落を表わす言葉でしたが、後に文明の届かぬ遅れた地域を指すようになりました。「鄙夫」とはそういう地域に住む人という意味でしたが、後に無学な人、または道徳観念の乏しい人を指すようになりました。ここでは後者の意味です。「～也与哉！」は強い疑念を伴った反語表現です。道義心に欠ける連中とはとても一緒にやっていけないということです。結果として孔子はせっかく手に入れた魯の国の高官の地位を棄て、新しい働き場所を求めて周遊の旅に出たのです。そしてこの旅は生涯続きました。

孔子の言葉は続きます。「其未得之也，患得之。(Qí wèi dé zhī. yě, huàn dé zhī.)」(其の未だ之を得ざるや、之を得んことを患う)。そういう人たちは、これを手に入れる前は、手に入れようと心を砕く。ここでいう「患」とは、そのために心身を勞することです。では「之」とは何でしょう。ここでは富、地位、権力などが考えられます。彼らはこれらを手に入れるためには骨身を惜しみません。そして首尾よく望みを果たした後はどうなるのでしょうか。

言葉はさらに続きます。「既得之，患失之。(Jì dé zhī, huàn shī zhī)」(既に之を得れば、之を失うことを患う)。得たいものを得た後は、これを守ることには心を砕きます。

不純な目的で手に入れたものは、たとえその手段が正当なものであったとしても、これを守る時には手段を択ばない。もしこれが権力であったら、なおさらのことです。権力を得たいと願っている段階では、権力を持たないが故に、これを得るための選択可能な手段は限られています、しかし、一たび権力を握ってしまうと、これを守る手段は無限に広がります。

そこで孔子はこう結んでいます。「苟患失之，无所不至矣。(Gǒu huàn shī zhī, wú suǒ bú zhì yǐ)」(苟も「之」を失わんことを患うれば、至らざる所無し。)一度手にした権力を守るためには、手段を択ばず何でもやってのけるものだ、と。

これはもう古代中国だけに限られたことではありませんね。現代の政治にも十分当てはまる話です。ちなみに「无所不至」は、現代中国語では「やりたいことなら善悪にかかわらず、何でもやってのける」という意味の四字熟語として使われます。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)